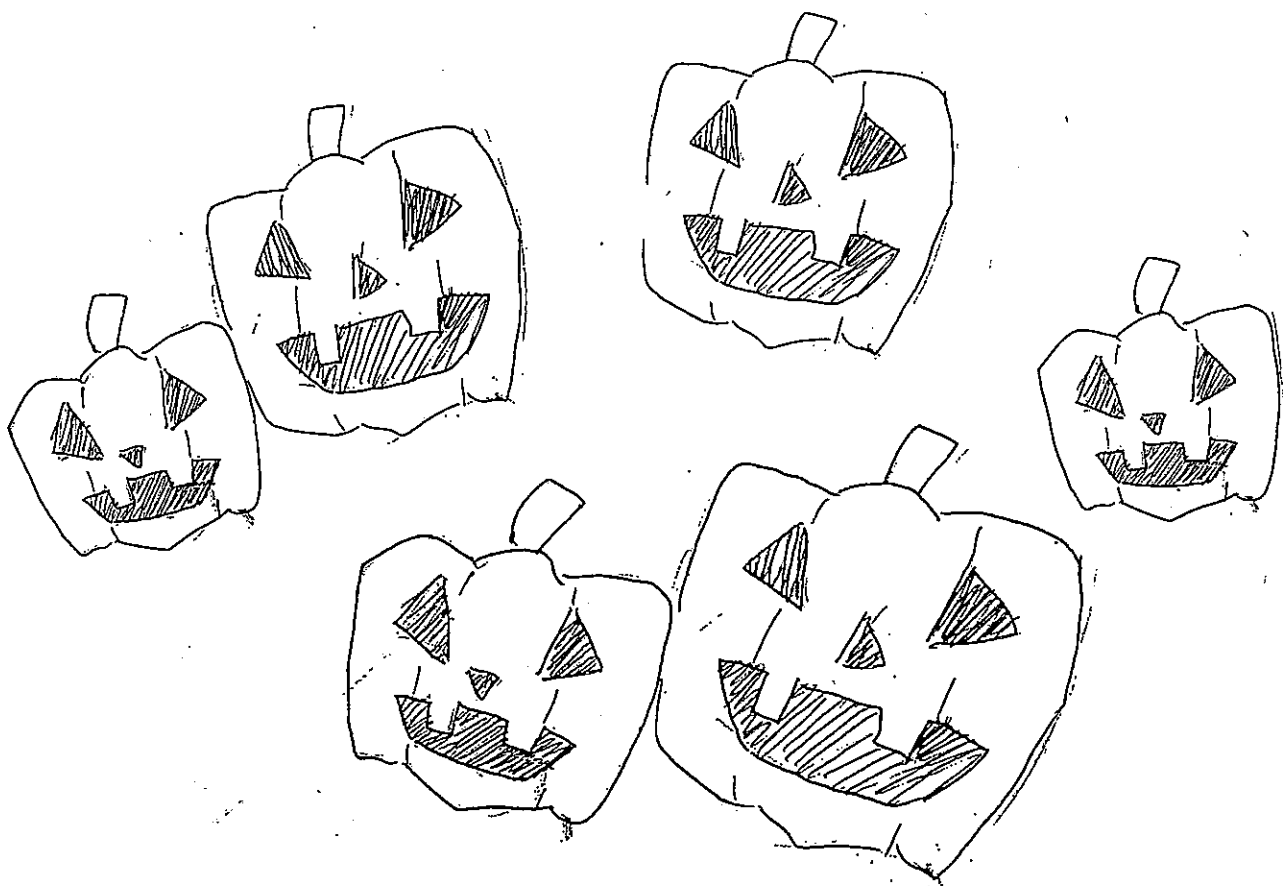


POLTADA

NO.48



YA広報誌『ポルトーダ』はWebサイトからでもご覧いただけます
稲城市立中央図書館 <http://www.library.inagi.tokyo.jp>
トップページ>利用案内>中高生の方>ヤングアダルト(YA)サービス

お休みホケ

実際に医療に関わっているという作者のこの本は「チームバスターの栄光」という前編となる物語があり、難しいところもありますが、ぜひ読んで下さい。

秋の夜。
じっくり読みたい
3冊を紹介しませう。

心雲探偵ハ雲①赤い瞳は知ってる。

神学

八雲の意味を知っているだろうか! 意味は雲が幾重にもかけ重なった状態のことだ。タイトルにもなっている八雲、この本の中では人の目の前として使われている。死者の魂をみることで生きる青年、有藤八雲の元を訪ねる大学生 晴香。理由は、学校で起こった幽霊騒動に巻きこまれた友人を目覚めるため。真相に近づくたびに加速する足音と(玉子)うたれる2人。現実味がなくなった人間関係と八雲というファンタジックの世界が混じった世界に引き込まれる!! ぜひお試しあれ。

塩の街

真奈がかわいく?
秋庭さんはかっこいい!
きゅんきゅんが
いいほてつまった
有ッワールド全開
のネです!

ある日、そのかす
ように囁く者が
運命を連れて
くる。

有川潜

私大好物
本で読む
でも読んで
たてて！

大喜利 ぶん

ねむい...

がんばれ ぶん!

4日に1回ねぼう

早く寝て休め
こないかな~

今日は休め~!

デー・マ

イボみボタ

青春という休みがない

朝起きない...

気が付けば 微かな

ゆうじんち いんち

あなたの “ひとこと” ^{ぶん} を貼って下さい!

みなさんが「イボみボタ」とたたかっている9月
中央図書館では、中高生の皆さんを
むかえたいと思っています。

- 中2の職場体験
- 高1の職場インタビュー
- 大3の司書課程の図書館実習
- 何かをつかんで学校に帰っていたんだけど
(おつかい、図書館スタッフ)

司書のあひ一日

一日の流れ

開館準備

問合せの
TELをこる

8:00 - 図書館に来る

~8:30 - 予約が入った本を
集める(引きあて)

~9:00 - 予約が入った本を
棚に戻す(取りに
来なかった本を流す)

休憩
12:00~13:00

~4:00 カウンター
もしくは返却ホストの整理
多量の設置など

11:00~2:30
申し込み用紙のチェック 印刷
館内の巡回

~10:30 - 事務室で電話取次
メールをチェックする

主に 事務とカウンターを
ローテーションする

書架整理
する

新しく入った本を
書架にたす

破損本の
修理をする

中絶票類を
印刷する

職場インタビューNさんのレポート『未来新聞』より抜粋させて
頂戴しています。フキタシは、図書館スタッフによるものです。

―番外編 放課後の図書室 その五―

アオイ紅葉

みなさん、こんにちは。高校二年生の平野真美です。わたしはいつも、ここ白川高等学園の図書室にある私だけの特等席で本を読んでいます。

夏休みが終わって気を引き締めて授業に臨む時間も与えられず、時間というのはあつという間に過ぎていくものなんです。正直、夏休みが恋しい……。

私はこの夏休みに家の近くにある書店で、今人気がある本を買ってずっと読んでいました。それはニヤン作『好きな人を忘れる方法があるなら教えてくれよ』という本です。

人気だから買って買ってみた方がいいけど、これって……小説じゃないのよね。片思いしている人や付き合っている人たちが共感する言葉がただひたすら書いてあるだけなんだけど……。私は、誰かと付き合ったことがないから、わかんないよ……。うう……。言つてて自分がつらくなつていくパターンだよ、これ。

だけどこの本を書いている人は、意外なんだけど男性なんだって！ 私は買った時は普通に女性を書いたんだろうなと思つてたから、余計に驚いちゃったけど……。

書いている人はちよつと、メンヘラが入つていたりしているんだけど、書籍に綴られている言葉の一つ一つが恋をしている人たちの共感を呼んでいるんだって。へえー。そうなんだー……。私、片思いとか幼稚園の先生以来だな……。まあもう、その先生は結婚しているんですけどね。トホホ……。

私が浅い悲しみに心を痛めていると、資料室から出てきた有栖川潤君が私の席から見えた。うちの学校の図書室は、ちよつと特殊です。ビデオを見るための視聴覚室と貸し出しができない本を閲覧できる資料室、そして、四百万冊の本が並んでいる中で勉強したり本を読んだりできるフリースペースが設けられているのです。まあ、どうでもいいですよ。

(それにしても、有栖川君がここにいるなんて……珍しいな)

彼は私の同じのクラスの有栖川潤(ありすがわじゅん)君。いつも機密文書と表紙に書かれているノートを持ち歩いている子で、左手には過去のけがで跡が残つていて隠しているのか包帯がまかれている、とつても不思議な子だ。まあ、イケメンだからいいんだけどね。

有栖川君は資料室から出ると、ノートの上にのせている一枚の紙を見ながらなにやら、またブツブツと何かを言っている。なんだろう……。

私は気になつて、耳を彼の声のする方に傾ける。

「……！ つ、ついに、手に入れたぞっ！ これで、俺も……く、ハハハハハ」

誰もいないと彼は思っているのか、普段クラスにいる時の声の倍以上の笑い声が図書室の中を響き渡る。

(あ、あれ……。おかしいな……。いつもの有栖川君じゃ、ない……。?)

私は彼の素らしき声に耳を傾けながら、普段の遠慮がちの彼の声を頭に流す。

(うん。だいぶキャラが変わつて……。いったい、……どうなつてんのっ！)

私は気になつて、そのまま続けて聞く。

「こ、これはっ！ 闇の秘密結社ダークオーバーサイドからの入るにあたっての質問シート、だ……！」

（何その無駄に長い名前。……というか、えっ！ 有栖川君って、そういうキャラだったのっ！ 新情報なんだけど）

私はイケメンの知ってはいけない情報に、どうやら踏み入ってしまったみたいだ。

（お、落ち着け、私。まだ、確信はまだ持っていないんだから……聞くことに集中しないと……！）

私は手をプルプルと震わせながら、さらに彼の独り言を聞く。

「え……つと、まず、第一の質問、あなたはこの夏休みをどうやって過ごしていましたか？」

（夏休み明けの最初の授業に先生が生徒に問いかける質問じゃねえか、それ）

「なんだこれは……。夏休み明けの最初の授業に先生が生徒に問いかける質問みたいじゃないか、これは」

（同じことを声に出して言わないでっ！）

シャープペンシルの芯をアンケートの紙らしきものにこんこんとたたきながら、有栖川君は不思議そうに首を傾げた。

「まあいい。これも闇の秘密結社ダークオーバーサイドに入るための近道ならば、な」

（いちいちその名前をいうのめんどくさくないのかな……）

私は読んでもいないのに、本のページをめくる。

（夏休みか……。家でこの間書店でまとめて十五冊も買った本をずっと、読んでたな……）

一冊が読み終わるごとに、一人でいるむなしさを心底感じていたよ……）

私は夏休みはろくな思い出がねえなと思いつつ、うーんと悩んでいる有栖川君の声の方に耳を傾ける。

「そう言えば、あの小悪魔天使の誕生日をしたな、この間」

（小悪魔天使？ ……もしかして、八千代君っ！）

私は驚いてがばつと、有栖川君の方を向く。私と有栖川君の間には大きな本棚が置かれているため、私の姿は彼には見えないのだけど。

私は本棚の隙間から、彼が首をうんうんとうなずいている姿を見る。

「友の喜ばしい誕生日した日を祝えるのだから、俺も思わず、嬉しくて涙を流してしまっただな。ああ……懐かしい」

（ええっ！？ 泣いたのっ！ 誕生日だよ、誕生日っ！ そこまで感情的にならなくても……）

「よしっ！ これにしよう。俺にとつて、充実した一日になったからな」

（そんな真面目に答えるものなの……。もつとそのダーク？ なんちゃらは、違う答えを求めているんじゃないの……）

私はついに、本をぱたんと閉じてしまっていた。よほど、私の中で彼の話が気になって

……」

「ああ……はいはい。俺の近所にある黒色をした汁のラーメン屋のことか……。あれ、

何が入ってたんだ」

「何をぶつくさと言っているんだ？ 置いていくぞ」

「お前を待ってたんだろうがっ！」

露草君は半分きれながらも鞆を持ち直して、荷物を持った有栖川君が大きい窓から出るのを見守る。

ガラリと音を立て開まる音を聞きながら私は、机に突っ伏す。

(今回の私の扱い……ひどくね)

とりあえず有栖川君のことは周りの女子に言わないでおこうと心に固く決意した私であった。

~~~~~

## 稲葉集

### 後記

こんにちは。今夏の暑かったですね。  
おはこんどおはようございます。この分米の  
言わね。早くおはよう。

あるみです。

高校生になって、忙しくなり、4343YA

ボラ引退しようかなと考えています。でも、

今回ボラターダを書いて楽しくて、あー、

どろりとうかばと思、ちや、ふふ。あーあ。

2学期から勉強頑張ろうと思、その間に  
でも、最後にはおもしろくないで、私の大大  
大好きな本を紹介したいです。おんてたてたて。

Thank you so

稲葉集 作成

YAボラターダ

のあつたん

2018年9月発行

稲城市立中央図書館  
(稲城市向陽台4-6-18)

<http://www.library.inagi.tokyo.jp>

TEL 042-378-7111

FAX 042-378-7162

Eメール [inagilib@library.inagi.tokyo.jp](mailto:inagilib@library.inagi.tokyo.jp)